大岡春卜の草花図と『明朝紫硯』

波瀬山祥子（大阪大学）

18 世紀の大坂画壇を代表する大岡春卜（1680～1763）の画本『明朝紫硯』（1746 年）は、これまで中国絵画との関連について活発に研究されてきたが、本発表では、春卜がこれまで描いてきた他の草花図との関連性に着目する。

春卜は、『画本手鑑』（1720 年）や『和漢名画苑』（1750 年）など数多くの画本を出版し、後世の画家に多大な影響を与えたことで高く評価される。なかでも大坂の書肆渋川清右衛門と大野木理兵衛から出された『明朝紫硯』上中巻は、木版摺、合羽摺、手彩色を併用した美麗な全 36 図の草花図であり、日本における最初期の多色摺画本とみなされ、美術史、出版史で重要な書物として注目を集めてきた。先行研究では、唐本の『芥子園画伝』第二集・第三集（以下唐本、1701 年）を典拠とする、橘守国の『絵本鶯宿梅』（1740 年）や和刻本の『芥子園画伝』（河南楼本、1748 年）が唐本の忠実な模刻であるのに対し、本書のおよそ半分の図は、唐本を典拠としながら、詩文を変更し時には図様も一部改変を加えて独自の工夫を行っていることが指摘される。なお、上中巻の一年後に刊行された下巻の初刷本については現存が確認できないが、文化 10 年（1813）京の書肆菱屋孫兵衛から刊行された木版摺の後刷本を参照すると、全 16 図のうち唐本を典拠とする図は一つもないことが分かる。つまり、上中巻の半分と下巻は春卜のオリジナルと考えられるのである。それらのうち上巻の「木蘭」など花瓶に生けられる草花図については、小林宏光氏が、蘇州版画の花鳥画に触発された可能性を示唆する。

しかし、これまで春卜が描いてきた他の草花図との関連も看過できない。たとえば、中巻の「風車」は春卜独自の図と考えられるが、俳人上島鬼貫との合作である「四季草花図巻」（1729 年、柿衞文庫所蔵）や、草花に関連する和歌を記した『画本福寿草』（初版は 1737 年、現存本は 1755 年版のみ）にも描かれる。特に「風車」に添えられる竹製の支柱は、『画本福寿草』や絵入俳書の『似錦集』（1735 年）の草花図にも描かれており、それらの影響を受けたものと考えられる。

さらに、春卜が図と詩との親和性が重要となる俳諧関連の作品を手掛けたことは、『明朝紫硯』の草花図と詩文との親和性にも活かされていると考える。たとえば上巻の「菱花」は、『芥子園画伝』を典拠とするが、画面右側に水に飛び込む蛙と菱花を新しく描き加えた点に春卜の独創性がある。独自に改変を加えたのは、図に添えられる詩文「満耳蛙声戯水草」から想起する、蛙の声に満ちた水辺の風景を表現しようと考えたからではないだろうか。

以上の考察をふまえ、『明朝紫硯』は中国絵画に限らず、春卜がこれまでに習得してきた草花図の表現がいかんなく発揮されたものであり、図と詩との親和性を強く意識した画本であると結論づける。